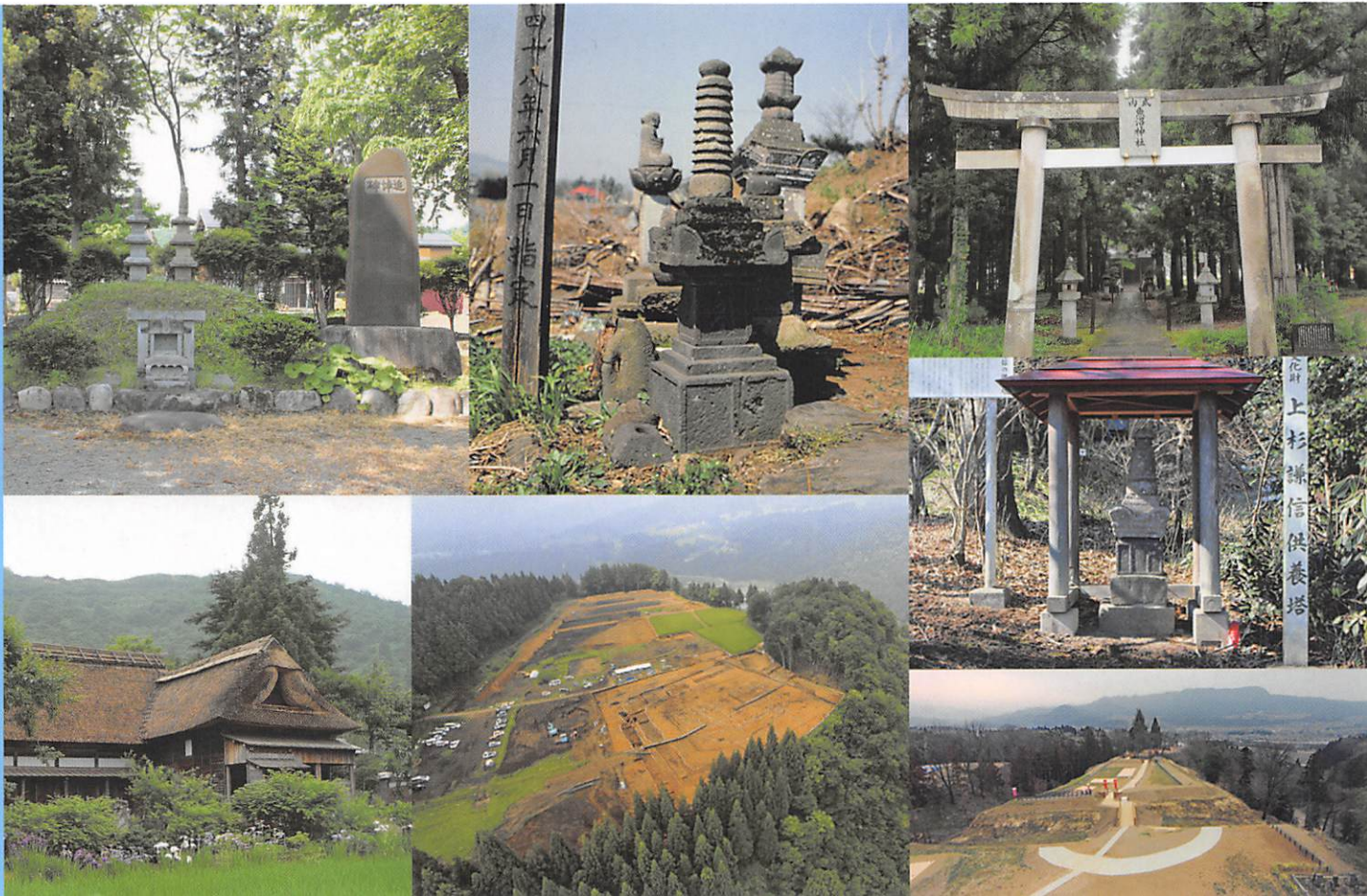


上杉謙信 越山の地

蘇る戦国時代

雪国観光圏
SNOW-COUNTRY.JP



雪国観光圏と 戦国時代



雪国観光圏とは

雪国観光圏は、新潟県魚沼市、南魚沼市、湯沢町、十日町市、津南町、群馬県みなかみ町、長野県栄村の3県7市町村にまたがる広域観光圏です。

世界で最も雪が深いと言われているこの地域では、10,000年以上も前から人が住み続け、雪国ならではの暮らしや知恵を受け継いできた歴史があります。雪国観光圏は広域で連携することで、これらの価値をつなぎ合わせ、磨き上げながら、100年後も続く地域を目指しています。

は じ め に

■『雪国観光圏』と戦国時代

3市3町1村(十日町市・魚沼市・南魚沼市・湯沢町・津南町・みなかみ町・栄村)により構成される「雪国観光圏」は、豪雪地帯として全国的に知れ渡っています。しかし、豪雪地帯といえば北海道・東北といった北国や北陸地方も有名です。しかし、ここで扱う地域を見ると「首都圏を抱える関東地方とは、風光明媚な山岳地帯を挟んで直接接している」といった、他の地域には見られない好条件に恵まれた環境下にあると言っても良いでしょう。それ故に、他の豪雪地帯よりも戦後いち早く鉄道・道路といった交通・通信施設の整備が進められ、それに伴い関東地方からの集客や、「雪国観光圏」ならではの観光物産・基幹産業である農産品の首都圏への供給地としての機能を果たしてきました。

本冊子で取り扱う戦国時代の関東では、いち早く下克上の世を成し遂げた北条氏がその大半を勢力下に治め、その勢力は「雪国観光圏」を形成する上信越地域にまで及ぼすといった動きをみせるようになります。ちょうどその頃、越後国(新潟県)では守護職を継いだ上杉謙信が登場、「雪国観光圏」地域を含む越後国に安定した勢力基盤を作り上げていたのです。

そうした背景の下、謙信はますます不安定化する関東に軍を進め、遂には北条氏の本拠である小田原城を包囲するなど、幾度となく関東に出兵しています。こうした動きは、その度に関東との境に位置する風光明媚な山岳地帯を越えることから、「越山」(えつざん)として当時を記した古文書や古記録に見ることができます。

しかし、謙信の死とともに他国からの干渉を受けることになるのです。謙信には景虎と景勝といった二人の養子があり、その跡目争いが他国衆の侵入を許したのです。景虎は、関東の雄北条氏康の七男として生まれた人物であることから、当然のように北条氏に支援を要請しました。これに対して景勝は、宿敵である武田勝頼(川中島で幾度となく争った武田信玄の子)に救いの手を求めたのです。南からの侵入者である北条氏の湯沢町・南魚沼市といった地域に「逆越山」の形で侵攻を許し、一方で長野県北部に位置する栄村を足がかりに津南町・十日町市域には武田氏の駐留を認めざるを得ないといった状況に陥ったのです。これが天正6(1578)年に起こった御館の乱と呼ばれる事件です。当初は、南魚沼市に築かれた樺沢城を占拠するなど、北条勢が有利に展開していました。

しかし、越年を余儀なくされた北条勢は豪雪には不慣れなこともあり、結局は関東に引き揚げざるを得ず、これを契機に戦局も景勝側に有利に進むようになりました。最終的には、景虎が自害するに及び、北条氏にとって何ら得ること無く幕引きとなるのです。こうした事例は、「雪国観光圏」なるが故の利点として現れた顕著なものでありましょう。津南町・十日町市域についても、武田家滅亡とともに上杉氏の領土として元の鞘に治まるといった形で終結したのです。

一方、「雪国観光圏」の中でも、唯一群馬県に位置するみなかみ町は様相を異にします。御館の乱により上杉氏と武田氏との間には越甲同盟が結ばれ、上野国(群馬県)北毛地域(みなかみ町を含む利根・沼田地域)は、これまでの上杉氏から武田氏へと移管が認められ、北毛地域の拠点である沼田城を中心とした地域を武田氏が支配するに及びました。武田氏が滅んだ後にも、武田氏の重臣であった真田氏がそのまま支配を続けたことから、その後も関東制覇を企てる北条氏との間で抗争が続くのです。これも、天正18(1590)年豊臣秀吉の小田原征伐により、ようやく領土をめぐる問題が解決されるに及びました。

このように、「雪国観光圏」に見る戦国時代は、上杉謙信の死を境に大きく変動したことが理解できます。こうした歴史を踏まえ、実際に足を運ばれ戦国時代の城郭に思いをはせて頂ければと思います。

■ 中世城館跡の縄張り図を読む

「雪国観光圏」に見られる城館跡には、特別な特徴があるのでしょうか。現在のところ、雪国なるが故の特徴と捉えられる事例は明確ではありません。

ここでは、城館跡研究にとって最も基本的な資料と位置付けられている縄張り図を基に、城館跡の見方・観察方法について、基礎知識習得の一助となる目的でまとめてみました。

城館とは、戦国時代における領域支配のための軍事的・政治的役割を担う施設であり、それだけに敵方からの襲来を阻止する装置が巧みに配置された施設なのです。それでは、巧みに配置された装置とは、こういったものがあるのでしょうか。それが堀であり土塁であり、出入り口を防御する馬出などがそれに当たります。

図1は、湯沢町に現在でも往時の姿を良好に残している荒戸城跡の縄張り図です。図中の右上にある大手とは、入城する際の表口に当たり、ここより城の中心であるⅠ郭に至るまでの防御施設の起点となります。Ⅰ郭を守るために配されたⅡ郭北側には堀が廻らされ、そこには土橋を伴う出入り口に当たる虎口（こぐち）が配置されています。さらにその外側にも土塁が配置されています。これは虎口からの侵入を防ぐ目的の防御施設で馬出（うまだし）と呼ばれています。さらにここでは、Ⅱ郭内側に対しても枡形虎口が設けられ、厳重に防御されていることが窺えます。

同じようにⅢ郭西側搦手口も馬出・枡形虎口が配置されており、またⅠ郭南西方に続く尾根にも、大きな堀切をもって適からの侵入を防いでいることが読み取れます。こうしたことから、城内への侵入を阻止する意図がハッキリと読み取れる縄張りが採られていたことが分かります。

この城跡の特徴のひとつに、北条氏が多用するとされるⅢ郭西側に見られる方形に廻らされた馬出（角馬出：かくうまだし）や、同じくⅢ郭全体を廻らすように掘られた障子堀（しょうじぼり）を挙げることができます。これらは、御館の乱の際に北条氏が南魚沼市に位置する樺沢城を占拠したことから、併せてこの城も北条氏の手に渡ったとする可能性を持たせています。

図2は、津南町に所在する今井城跡の縄張り図です。図中3に見られる箇所が大手口に当たり、鍵形に屈曲を見せる堀により外郭とⅡ郭とに区画されています。屈曲した箇所の左側には、三日月形に掘られた堀があり、その内側を通ると、鍵形に掘られた堀に到ります。ここでは、先ほどの荒戸城跡とは異なり架橋が配置されていたようで、ここが虎口に当たり、三日月堀は虎口を防御するための馬出に当たります。さらにここでは、架橋を渡りⅡ郭に侵入しようとする敵兵に向かい、鍵形に屈曲した面を利用することで、側面より攻撃を加えることができるように考えられた横矢（よこや）も採用され、より一層厳重に防御されていることが分かります。

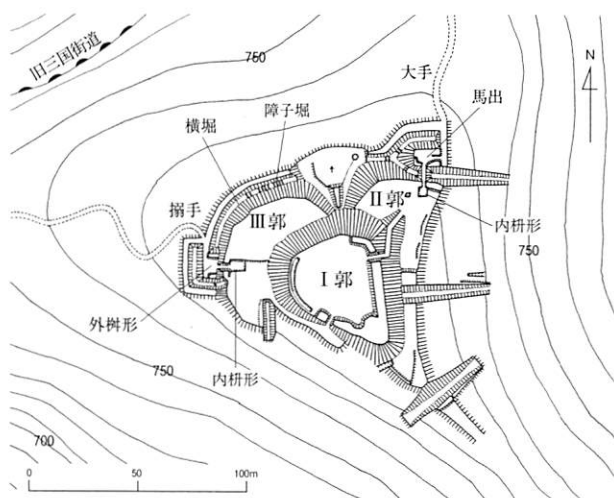


図1 荒戸城跡縄張り図（鳴海忠夫作図に一部加筆修正）

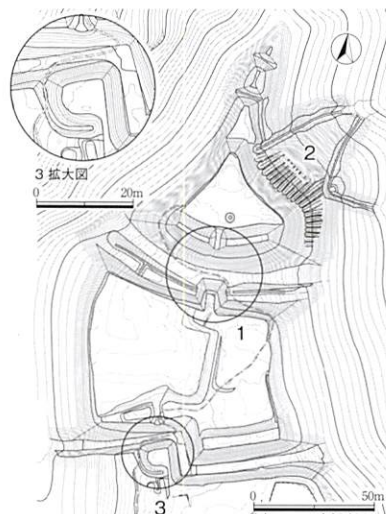


図2 今井城跡の主な遺構

1 大堀切 2 縦堀及び連続縦堀群 3 丸馬出

Ⅱ郭から城の中心であるⅠ郭との間には、大規模な堀切が掘られ遮断線としています。また、Ⅰ郭北東斜面には、十数条に及ぶ堅堀が連続して掘られており、連続堅堀が配置されるといった特徴を有しています。

この城の特徴として、Ⅱ郭虎口を防御するために掘られた馬出堀の平面形状が、先ほどの荒戸城跡とは異なり、弧状に掘られている点を挙げることができましょう。弧状に掘られたいわゆる三日月堀は、その分布調査により甲州武田氏に多く用いられたとされています。既述のように、御館の乱による越甲同盟を契機に津南町・十日町市域には武田氏が進駐してきたことが、古文書（小森澤文書）などで知られています。残念ながら具体的な場所については不明ですが、今井城跡に見られる三日月堀を伴う丸馬出などを考えた時、あるいはこの今井城跡に武田氏が入ったのではないのでしょうか。

■ 用語解説

本城（ほんじょう）	領域支配のための根拠地となる城。
支城（しじょう）	領域内を安定的に支配するため、本城を機能的に補完する関係を持つ城。
実城（みじょう）	城郭のⅠ郭（本郭・主郭）、近世でいう本丸を指す。
要害（ようがい）	古文書・古記録などをみると、城郭と同じ意味合いで使われることが多い。
寄居（よりい）	要害と同じような意味合いで使われることが多い。ただし、駐留するといった意味合いをも持たせている。
大手（おおて）	城の正面口。
搦手（からめて）	大手に対して、城の背後を意味する。城兵の退路として用いられる。
郭（くるわ）	曲輪とも書き、それぞれの機能を持たせた区画をもつ平場。各郭は、堀や段差を設けることで区画されている。
虎口（こぐち）	城や城を構成する郭への出入り口。通常、堀や土塁を挟んだ土橋・架橋と一体となって構成される（図1・2参照）。
桁形虎口（ますがたこぐち）	虎口の防御としては最も嚴重な構えをなし、土塁・堀などで四角に囲うことからついた名称（図1参照）。
馬出（うまだし）	虎口の前面に堀や土塁をもって敵の侵入を防ぐ施設。兵站性を考慮した大規模なものから、数人規模といったものまで見られる。その形態から大きく丸馬出と角馬出に分けることができる（図1・2参照）。
横矢（よこや）	虎口からの侵入者に対し、側面から攻撃が加えられるように堀や土塁・切岸に屈曲部を設けた施設（図2参照）。
切岸（きりぎし）	城壁斜面を意図的に利用し、郭区画や防御施設として用いたもの。
堀（ほり）	郭の周囲を取り囲むように溝状に掘られたもの。敵からの進入を阻止する遮断施設のひとつ（図1・2参照）。
堀切（ほりきり）	段丘端部に位置する舌状台地や山城などで、尾根線に対し横断方向に掘り切られたもの。敵が侵攻しやすい尾根道を遮断する効果がある（図2参照）。
堅堀（たてほり）	山や丘の斜面に等高線と直角方向に、山の上から下方へと帯状に掘られたもの（図1参照）。
連続堅堀（れんぞくたてほり）	堅堀が連続して数条から数十条と掘られたもの。堅堀同様、敵の斜面からの侵攻を防ぐ施設として考えられている（図2参照）。
障子堀（しょうじほり）	堀底の面が、水田の畦を思わせるような帯状の高まりがあるもの。堀内の移動を拘束、または保水を目的としたとする考え方がある。北条氏関連の城郭に多く見られる（図1参照）。
土塁（どるい）	土を盛り上げ、帯状に築いたもの。戦国時代になると、堀に沿う形で築かれることが普遍化される（図1・2参照）。

北関東の奥座敷 みなかみ町



みなかみ町は上野国（こうずけのくに）の最北端にあり、北は三国山脈を境に越後と接しています。この上越国境には人々を阻むかのように険しい山々が聳え立っていますが、人々は遅く、すでに古代以前から三国街道と清水峠道という二つの道を使って活発に往来していたようです。特に三国街道は佐渡から江戸までをつなぐ重要な流通路として、江戸時代には猿ヶ京に関所が置かれていたほどです。三国とは、越後、上野、信濃三国の境目という意味であり、戦国時代には上杉、北条、武田といった三大勢力が、このみなかみ周辺の上野領有をめぐる激しい争奪戦を繰り広げていたのです。

越後と上野をつなぐ三国街道と清水峠道

室町幕府弱体化後、約100年続いた戦国時代。上野国、現在の群馬県では甲斐・信濃の武田、相模・武蔵の北条、越後の上杉といった三大勢力が激しい攻防戦を繰り返していました。その前半は越後の上杉勢が上野の最北端みなかみ町を足がかりとして、活発に関東進出を展開していたのです。当時、越後と上野をつないでいた三国街道と清水峠道は現在、一部が整備され、アウトドアや紅葉などの観光名所となり、シーズン中は多くの観光客で賑わっています。

室町幕府より東国経営を任されていた関東管領の上杉憲政は、相模国（小田原）を本拠地に関東を北上して勢力を拡大しつつあった北条氏に逐われ、清水峠を越えて越後に落ちのびたと伝えられます。その後、上杉謙信は三国街道を軍道として16回にわたり関東進出を行います。その謙信の死後、北条氏から上杉氏へ養子に入っていた景虎と、謙信の甥の景勝の間に家督争い「御館の乱」が起ると、北条勢が景虎応援のため清水峠を越えて出兵したことが上杉記に記されているのです。

江戸時代には「入鉄砲（いりでっぽう）に出女（でおんな）」といって江戸へ武具が入ることと、人質になっていた全国の大名の妻子が国元へ密かに帰ることを防ぐため、幕府は全国53ヶ所に関所を設けました。その一つとして三代将軍家光の頃、三国街道にも三国峠を越えた上野側に猿ヶ京関所が設けられ、江戸にとっての北の守りを担っていたのです。一方、清水峠道は現在のみなかみ町湯桧曽に口留番所が設けられ、一切の通行が遮断されてしまいました。猿ヶ京関所跡は現在、旧役宅が復元され、資料館として一般公開されています。そこには様々な人々が関所を通過した記録として各種通行手形等が残されています。また、三国街道沿いには宿場町が営まれ、永井宿や須川宿、塚原宿などは現在でもその面影を残しています。

三国街道と清水峠道沿線には数々の歴史遺産が残されています。これらは越後と上野が三国山脈という壁に阻まれながらも、二つの道を通して人々が活発に往来していたことを物語っているのです。



三国山・山頂 標高二六六三m



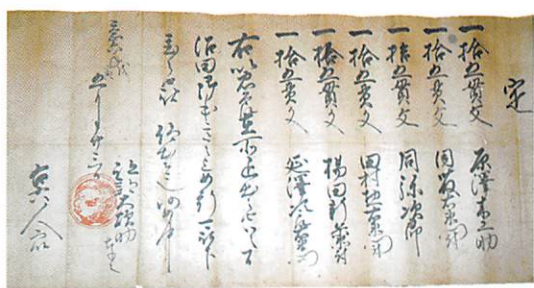
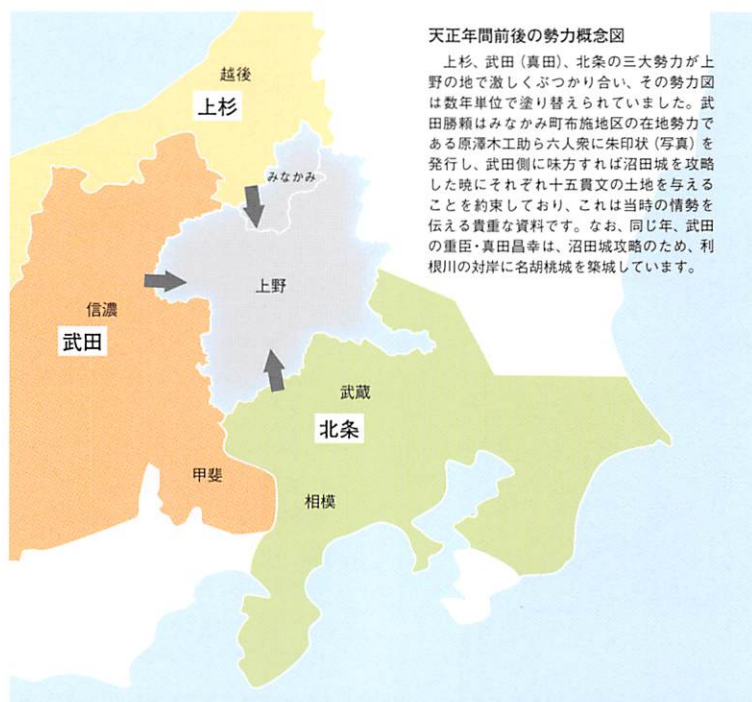
三国峠に祀られている三国権現



猿ヶ京関所跡



清水峠 標高二四四八m



武田勝頼の朱印状



名胡桃城跡

利根郡みなかみ町下津3437 / 県指定史跡

上杉謙信が死去すると上野をめぐる勢力図は一変して一時北条勢の勢力圏となりました。しかし、すぐに武田勢も巻き返して、当時、利根川東岸にあった北条勢の沼田城を攻略する前線基地として、武田の重臣・真田昌幸は対岸に名胡桃城を築城したのです。一方、豊臣秀吉は天下統一を目前に控え、大名間の争いを禁じる惣無事令を發布していました。このような中、上野では北条対真田による緊張状態が続き、ついに天正17(1589)年、北条方沼田城代の猪俣邦憲は、名胡桃城を一方的に占拠。この行為を惣無事令に違反したとして、秀吉は小田原城を攻撃する口実にしたのです。4ヶ月後、関東に覇を唱えていた北条氏は、空前の大軍勢の前にやむなく降伏。これにより秀吉に敵対する大きな勢力は消滅します。結果的にこの名胡桃城をめぐる小さな事件が戦国時代に終止符を打つことにつながったのです。

丸馬出、木橋、土塁、門などの一部が復元され、現地にはボランティアガイドが常駐しています。

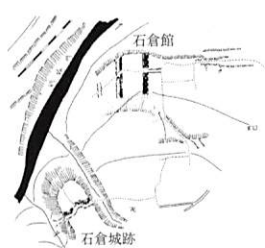
名胡桃城址案内所 ☎0278 (62) 0793



宮野城跡 (猿ヶ京城跡)

利根郡みなかみ町猿ヶ京温泉128

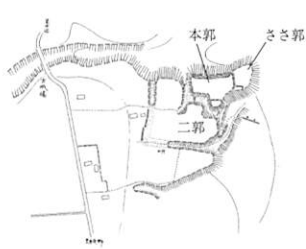
上杉謙信(長尾景虎)は宮野城を足がかりに関東に進出しました。これを越山(えつざん)と呼び、10回以上も行われています。現在、本郭はホテル敷地内となり北を除く周囲は赤谷湖(人造湖)になっています。



石倉城跡

利根郡みなかみ町石倉1788 / 町指定史跡

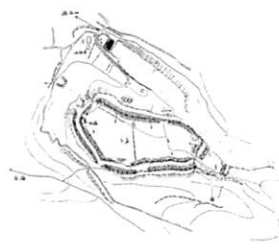
平井城(群馬県藤岡市)を根拠地としていた関東管領・上杉顕定(あきさだ)が、故郷越後との中継地として、文明～永正年間(15～16世紀)に築城したと伝わります。利根川を望む台地の先端部分に立地しています。



小川城跡

利根郡みなかみ町月夜野1125 / 町指定史跡

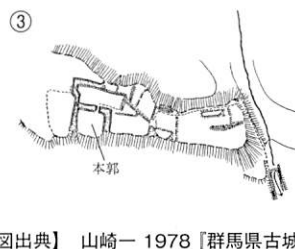
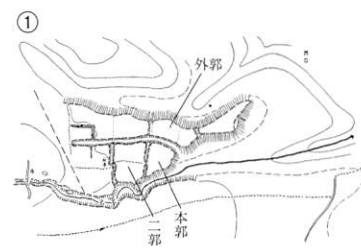
上杉、北条、真田の勢力争いの真っ只中にあり、城主・小川可遊斎(かゆうさい)は巧みな外交、ゲリラ戦法などにより戦国時代をたくましく生き抜きました。天文～天正年間(16世紀)の築城。



明徳寺城跡

利根郡みなかみ町後閑1717-1 / 町指定史跡

謙信の死後、上杉勢は上野から後退し、一時北条領となっていました。天正7(1579)年、武田勢の真田昌幸も勢力を拡大して利根川西岸に名胡桃城を築城すると北条方はこれに対峙する形で対岸に明徳寺城を築城しました。



①中城跡 (薄倉城跡)

利根郡みなかみ町須川字薄倉地内

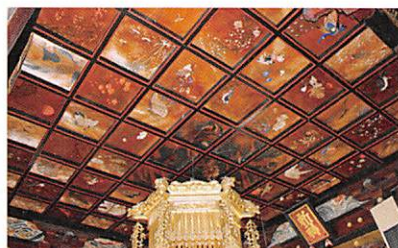
②箱崎城跡

利根郡みなかみ町布施字箕輪地内

③諏訪の木城跡

利根郡みなかみ町新巻字諏訪ノ木地内

【縄張り図出典】 山崎一 1978『群馬県古城累址の研究』下巻 群馬県文化事業振興会 (一部加筆)



如意寺

利根郡みなかみ町上津2578 / 町指定重要文化財(天井絵)

文明年間(1469~1486)、真田以前の在地勢力であった沼田城主・沼田景光の姉の如意尼が草庵をつくらせたのが本寺の始まりと伝わっています。文久2(1862)年には地元出身の画家・林青山(せいざん)が本堂大広間の格天井に72面の天井絵を描いています(町指定重要文化財)。中央9面には竜が、その他は一枚一枚に花鳥獣が色彩鮮やかに描かれています。



建明寺

利根郡みなかみ町湯原985

関東管領の上杉憲政が天文21(1552)年、小田原の北条氏に逐われて上杉謙信(長尾景虎)を頼って越後へ落ちのびる際に同行した秀翁竜樹という僧が、現在のみなかみ町粟沢地内に建立した小庵がその発祥とされる曹洞宗の寺院。作者、年代等詳細は不明ですが、上杉憲政の坐像と伝えられる木造が安置されています。建明寺は現在、粟沢から湯原へ移築されています。



綱子の宝篋印塔

利根郡みなかみ町綱子37 / 県指定重要文化財

永和2(1376)年、藤原守泰が大檀那となって数人の講中を結んで建立したと伝わります。宗教色の強い宝篋印塔で、塔身に「南無阿弥陀仏」と刻印されているのは群馬県内では唯一です。これは浄土信仰の表現で、当時の地方信仰のあり方がうかがわれる貴重な資料です。相輪上部と芝付が欠損。総高129.3cm、基礎高38.2cm、幅38.2cm。



貞治の宝篋印塔

利根郡みなかみ町上津1610-1 / 町指定重要文化財

石造積上式塔の宝篋印塔で、みなかみ町上津地内の馬廻堂(地藏堂)の境内に安置されています。塔身は縦に長い長方形で、四面に種子(梵字)が陰刻されています。総高110cm、全階形関東型式に属す貞治年間(1362~1367年)の宝篋印塔です。最上部に乗せられている相輪は他の石材とは明らかに異質なものであることから、別の相輪で代用されているものと思われます。



明徳の宝篋印塔

利根郡みなかみ町下津4061 / 町指定重要文化財

天台宗三重院の境内にある石造積上式塔の宝篋印塔。現存部の高さは約130cmで、全階形関東型式に属しています。台石は二区に分けられ、「明徳五年」(1394)と彫られ、笠部分は上に向かって突起が付けられています。残念ながらこの台石と笠部分を除き、現在ある塔身および相輪は明らかに石材が異なることから、後世に取り替えられたものと考えられています。



上杉謙信の供養塔

利根郡みなかみ町上津2578(如意寺境内) / 町指定重要文化財

天正6(1578)年3月13日、上杉謙信が春日山城で病死すると、当時の沼田城代・上野中務(なかつかさ)家成(いえなり)はその死を悼み、恕林寺(じょりんじ・現在のみなかみ町後閑)に供養塔を建立して越後へ去ったと伝えられます。「造立石塔一基」「奉為謙信法印」「天正戊寅四月〇日」(1578)と彫られています。その後、恕林寺は戦火に遭い、供養塔は如意寺に移されました。



謙信のさかさザクラ

利根郡みなかみ町相保1474 / 県指定天然記念物

上杉謙信(長尾景虎)は三国峠を越えて10回以上関東進出を試みていましたが、その際、この地に立ち寄り、上杉憲政ゆかりの日枝神社を参拝しました。その時、謙信は春日山から持参していた桜の鞭を逆さに挿したところ、数年後には成長して桜が咲き始めたといわれます。推定樹齢約450年、樹高約10mのエドヒガンザクラで、地元では豊年桜とも呼ばれ、花の数で作柄を占っていました。

越山の拠点 湯沢・南魚沼



湯沢町の概要

湯沢町は新潟県の中中部最南端に位置し、三国山脈（越後山脈南部）の北側に開けた町で、長野県・群馬県と隣り合っています。総面積の94%が山地で、町の東側、南側、西側の三方を海拔2,000m前後の山々に囲まれ、北側には六日町盆地が連続しています。越後と上州や関東とを結ぶ場所であることから、古くから人や物の行き来を支えた土地です。現代では国道17号のほか、J R上越線・上越新幹線、関越自動車道といった高速交通網が発達し、首都圏からの日帰りも可能な観光地となっています。

その一方で、山に囲まれた湯沢町は修験者の修行場としても栄え、中世以来と伝えられる修験寺も湯沢、熊野堂、土樽地区にみられます。石臼の泉福寺跡と伝えられる場所の近辺からは大量の古銭が出土しており、三国街道の重要な拠点として賑わっていた往時の姿が想像されます。

現在も温泉を楽しめる湯沢町ですが、万里集九による記述から、中世の頃には「鈎懸の湯」（現在の貝掛温泉）が湧いていたといわれています。

南魚沼市の概要

関東方面から湯沢の谷を抜け、最初に広く開けるこの地域は六日町盆地と呼ばれています。東西の山地からは数多くの中小河川が盆地の中央を北流する魚野川に注ぎます。これらの河川的作用により扇状地が発達していることがこの地域の特徴です。新潟県内有数の古墳群である飯綱山古墳群が築造されるなど古くから繁栄し、また魚野川を利用した舟運や市、街道の宿場として発達してきました。また、霊峰といわれる山々も多く存在し、修験などの山岳信仰が盛んで、特に八海山の麓で行われる火渡りは有名です。このような信仰の土壌を背景に、戦国時代には有力者の庇護を受けた臨濟宗・曹洞宗の大寺院が作られました。上田荘と呼ばれるこの地を拠点とした上田長尾氏からは上杉景勝を輩出しました。特産品であった麻織物は上杉氏の経済的基盤の一つであり、現在は「越後上布」と呼ばれ、その製作技術は国の重要無形文化財、ユネスコ無形文化遺産として継承されています。





普光寺

南魚沼市浦佐2495

市指定文化財(楼門、文書群、ケヤキ群、裸押合祭)

真言宗豊山派吉祥山普光寺は、毘沙門堂を管理する別当として建立されました。鎌倉時代以降、武将や領主たちから手厚い庇護を受け、上田長尾氏、上杉謙信や景勝、堀氏などから送られた古文書が数多く残されています。

山門は日光東照宮陽明門を手本として天保2(1831)年に完成しました。二階には、幕府御用絵師である板谷桂舟により描かれた天井絵や壁画が残されています。

寺の裏山には戊辰戦争の際に小出島の戦いで死亡した薩摩・長州藩兵の墓があり、その遺品も大切に保管されています。



浦佐城跡 南魚沼市浦佐／市指定史跡

普光寺の背後、三国街道や魚野川を見下ろせる薬師山に築かれた、標高約300mに立地する中世の山城です。御館の乱の際には清水藤左衛門が浦佐城の守備を命じられています。



雷土城跡(板木城跡)

南魚沼市雷土、魚沼市板木／市指定史跡

南魚沼と北魚沼の境界に築かれた境目の山城です。その立地故に幾度も戦いの舞台となったことが古文書に記されています。



長森原古戦場 南魚沼市下原新田121-44

永正7(1510)年、越後守護代長尾為景(上杉謙信の父)が関東管領上杉顕定を返り討ちにした下剋上の戦いの舞台です。付近は寺浦百塚など非常に多くの塚が存在しています。



龍谷寺 南魚沼市大崎3455／市指定文化財(欄間)

曹洞宗龍谷寺は、堂平遺跡がその前身といわれ、現在の境内周辺も大崎館跡の居館跡と考えられています。本堂には石川雲蝶や小林源太郎により彫られた欄間があります。



君帰観音 南魚沼市君帰1094／県指定文化財

君帰観音は、建久7(1196)年に建立された観音堂の本尊である木造聖観音立像のことです。33年に一度御開帳されます。源義経一行が立ち寄った際に經典とともに納められたといわれています。



天昌寺

南魚沼市思川39／県指定文化財(仏像、12~4月は拝観不可)
市指定文化財(欄間)

延徳年間に曹洞宗に転じ、天正年間に今の名前になったといわれています。本堂の欄間彫刻は、熊谷の小林源太郎の作です。



坂戸城跡

南魚沼市坂戸／国指定史跡

坂戸城は中世の山城で、御館の乱の際には関東方面への防御の要となりました。上杉氏の国替えにより入部した堀直奇により近世城郭として整備されましたが、慶長15(1610)年に堀氏が国替えになったため廃城となりました。麓には居館跡が作られ、その前面の土塁には自然石を積み上げた石垣が残ります。居館の前面には平坦面が広がり、家臣屋敷跡があったといわれています。春にはカタクリが群生します。さらにその先には埋田といわれている魚野川の旧河道があり、これが内堀の役目をしていたと考えられています。標高634mの山頂の郭は実城と呼ばれ、富士権現の社が建立されています。東側斜面には石積みも見られます。現在登山道が整備され、多くの登山者が訪れています。



雲洞庵 南魚沼市雲洞660／県指定文化財(本堂)

応永12(1405)年、顕窓慶字により開かれた寺院。参道には法華経が書かれた石が埋められ、そこを歩くとご利益があることから「雲洞庵の土踏んだか」という言葉が生まれました。



塩沢大館 南魚沼市塩沢

三国街道と関東への最短ルートである松之山街道の交差点に築かれた館です。鈴木牧之によると南北朝時代に新田一族の大館蔵人により築かれたとされています。



樺沢城跡

南魚沼市樺野沢・大沢／県指定史跡

御館の乱では一時期北条方に占領されるなど、激しい戦場の舞台となりました。麓の龍澤寺には上杉家縁の古文書や仏像が残ります。



関興寺 南魚沼市上野267

臨済宗円覚寺派最上山関興寺は、応永17年に関東管領上杉憲顕の子といわれる覚翁祖伝和尚が高僧の普覚円光禅師を招いて開山したといわれています。



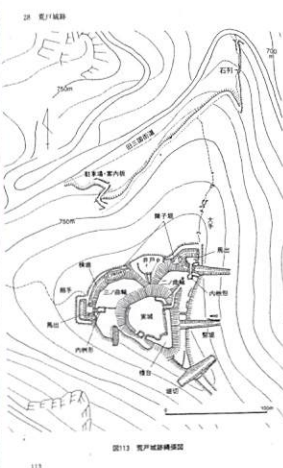
薬照寺 南魚沼市君沢851／県指定天然記念物(大カツラ)

真言宗智山派瑠璃光山薬照寺は寛徳2年に開山されたといわれています。石段の上の大カツラは推定樹齢250年といわれる大木です。昭和20年、ビルマ国(現ミャンマー国)首相のバー・モウが亡命したお寺として有名です。



石白古銭出土地 湯沢町大字湯沢1855番地

本州で第1位の出土量を誇る古銭の出土地。上杉房定と関係が深い「泉福寺」の跡地と考えられることから、当時の軍資金だったのではないかと考えられています。



荒戸城跡

湯沢町大字神立字袖山 新潟県指定史跡

天正6(1578)年の御館の乱の際に、上杉景勝が築城させた城です。いつ、誰が、何のために築城したか特定されている、全国的にもまれに、文献史料が豊富に残る城跡です。また上杉遺民一揆が立てこもった城と推定されており、江戸時代を通して、悪用を恐れた領主が、民衆の立ち入りを禁止したとも言われます。そのため戦国期の山城としては遺構が比較的良く残っていることも大きな特徴です。御館の乱では、上杉—北条—上杉—北条—上杉と相次いで城が渡り、それぞれによる改修が短期間に行われているため、上杉・北条両氏の戦国後期における築城の特徴が残っています。小さな城なので、全体像を把握しやすく、城跡初心者にも比較的わかりやすい造りです。



魚沼神社 湯沢町大字神田487

延喜18(918)年、「神立三社大明神」との社号を授与されたとの告文も残っています。雷火で社殿が炎上したため、応永34(1427)年に宮換戸の地から現在の宮林に遷宮されました。



伊米神社 湯沢町大字三俣

苗場山の里宮として建てられた神社。創立の年代は分かっていません。伊米神社の祭日である7月12日には、地域の方が昔ながらの衣装を身に着けて地域の集落をまわります。

三国権現 湯沢町大字三国

三国峠の頂上にある三阪神社が三国権現と呼ばれています。桓武天皇の延暦年中(791年頃)征夷大將軍 坂上田村麻呂が越後の弥彦神社・信州の諏訪明神・上州の赤城明神の三社を祭って祈願し、更に三国峠に祀ったのが三阪神社の起源であると伝えられています。



浅貝寄居城跡 湯沢町大字三国字上寄居

浅貝の地は上杉謙信が越山をする上で度々利用した土地。永祿13(1570)年に沼田との往復の拠点、元亀2(1571)年には軍事拠点としていたことが書状からわかります。

三国峠清水峠 街道をおさえる越後の要地「上田庄」

中世の越後国は、関東に大きな影響を持つ国でした。中でも上田庄(湯沢町～南魚沼市一帯)は鎌倉北条氏、新田氏、足利氏、上杉氏と、中央の情勢に大きな影響力を持つ人々の領地になっていました。上田庄は、越後と関東をつなぐ「三国街道」「清水峠道」が収束し、それを監視できる土地として重要な土地だったのです。

三国街道は、最も標高の低い所を通る経路で、距離は長いですが、労力が少なくすむため、古くからよく使われています。しかし災害や季節などにより少しずつ道筋が変わっているため、当時の道筋を正確には断定はできません。

また三国街道は多くの舞台になっています。治承・寿永の乱(源氏が平氏を打倒する内乱)では木曾義仲と戦った城氏の一軍が越え、南北朝時代では新田義貞の死後、義貞の遺子が再蜂起した際の拠点になったとも言われます。室町時代後期では、越後守護

の上杉房定が7回も三国峠を越えています。また上杉房定は文化人として有名で、聖護院門跡の道興、東福寺の万里集九、常光院の亮恵などが越後を訪ねて三国峠を越えています。

上杉謙信の時代になると、17年の間に16回も国境を越えており、その多くの場合、謙信が造らせた「寄居城」のある三国峠を越えていたと考えられます。謙信の死後、上杉景勝は「御館の乱」の最中に三俣集落の湯沢側の山に三国街道を見下ろすように「荒戸城」を築いていて、三国街道の難所をおさえることの重要性がうかがえます。

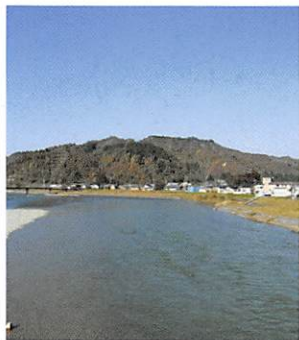
清水峠道は、急峻ですが最短経路のため、中世では軍用道路として使われていました。史料上の初見は「清水城(直路城)」そして「荒戸城」を築くように命じる上杉景勝の書状ですが、文面から、以前から利用されていたことがわかります。

南会津への街道と管理 魚沼市





南会津と越後国境に位置する新潟県魚沼市（北魚沼）には、魚野川と破間川が流れ、魚沼市下倉地区で両河川が合流し流れを大きく西に変えて長岡市川口地区で信濃川に繋がります。東北や関東との人と文化の交流は、縄文時代以来、当地域出土の考古資料から推察されます。中世の頃、魚沼市から小千谷市の一部を中心とする地域は、藪神と称され、刺上郷であった可能性もありますが、詳細は不明です。この地域には魚野川を渡らず通る三国街道（栃原峠ルート）や、越後と会津地方を結ぶ六十里越及び八十里越、銀山採掘のため整備した銀山街道など街道が通り、街道沿いを中心に山城や宿場、寺院、目黒家をはじめとする庄屋などが点在しています。また当地域は、関東方面・会津方面・古志方面への交通・軍事の要衝として重要な場所であり、その中心に県史跡下倉山城が築城しています。下倉山城を舞台に永正年間以降数々の攻防戦があり、上杉氏が会津移封後の慶長5年「上杉遺民一揆」の際には、会津の上杉景勝は豊臣方と協力し徳川方を滅ぼそうと六十里越や八十里越から越後に侵入し、下倉山城跡を攻めたとする歴史があります。



下倉山城跡

魚沼市下倉
県指定史跡

関東から越後へ侵入する陸路を遮るとともに河川交通を掌握できる要所に位置します。天正6(1578)年の御館の乱や慶長5(1600)年の越後遣民一揆の戦場になりました。井戸跡・掘切・曲輪・土塁などが残存します。



组板平城跡

魚沼市根小屋
市指定史跡

南北朝時代、足利尊氏の命で越後国守護になった宇都宮氏綱に従事した多功肥後守の居城と伝えられてます。井戸跡・掘切・曲輪・土塁などの遺構が残っています。



館ノ内居館跡

魚沼市山田
市指定史跡

自然地形を利用した市内屈指の中世居館跡。発智氏か原氏の居館跡ではないかと言われています。



長松の十三仏塚

魚沼市江口
県指定民俗文化財

中央に上円下方形塚、どの両側に6基ずつ小型円形塚が東西方向一直線に並んでいます。築造年代は南北朝期と推定されます。木曾義仲の妻巴御前が、義仲供養のため造った塚だという伝説が残っています。



おこり塚板碑群

魚沼市江口
市指定史跡

南北朝時代の越後型板碑が5基現存します。正中12(1357)年銘1基、応安7(1374)年銘2基が確認できます。昭和39(1964)年の土地改良の際に現在の場所に移されました。



連日の正中板碑

魚沼市連日
市指定文化財（考古資料）

正中2(1325)年銘の魚沼市
唯一の関東型板碑で、石材は緑
泥片岩であります。



円福寺
木造阿弥陀如来坐像

魚沼市佐梨／国重要文化財（彫刻）

仏像の胎内に建保2(1214)年
 大歳甲戌8月26日造立と記され
 た銘文があり、日本美術史上、
 貴重な仏像のひとつでありま
 す。桂材の寄木造りで、平安後
 期の定朝様式です。



四福寺
木造毘沙門天立像

魚沼市佐梨／県指定文化財（彫刻）

鎌倉時代初期の仏師運慶法印の作。桂材の寄木造りで極彩仕上げでしたが、長い間に剥落し、現在は足元に一部白く残るのみとなりました。上杉謙信が信仰した仏像として有名。



永林寺
石川雲蝶彫刻

魚沼市根小屋／市指定文化財

石川雲蝶が安政2(1855)年から13年間で本堂の「小夜の中山蛇鳥物語」、須弥壇の迦陵頻伽などを彫りました。位牌堂の天女像は緻密で躍動感あふれ、華麗な色彩が残っています。



西福寺
石川雲蝶彫刻

魚沼市大浦／県指定文化財（彫刻）

石川雲蝶は木彫の名匠。本作品は39歳のときから6年の月日の間に製作されました。本寺の全彫刻、壁面の漆喰細工、本堂の襖絵、仁王門前の石地像尊、禁酒碑石の文字彫・座石の臥牛などを仕上げています。



目黒家住宅(目黒邸)

魚沼市須原 892
国指定重要文化財

寛政9(1797)年に11代目、目黒五郎助が建てた割元庄屋(大庄屋職)の役宅を兼ねた豪農の住宅です。近世村役人層の典型的な住宅として貴重な遺構であります。



佐藤家住宅

魚沼市大倉
国指定重要文化財

中越地方に分布する中門造りの初期の形式をもつ民家です。昭和54年の解体復元工事で墨書が発見され、元文3(1738)年建立と判明しました。



鷹待山城址

魚沼市大栃山
市指定史跡

中世の山城で、穴沢氏が応永7(1400)年頃に当地入り築城したと伝えられ、上杉氏が会津へ移封されるまで6代の居城と考えられています。隣の穴沢集落には穴沢氏の墓塔である魚沼市内最古の五輪塔が所在します。



滝之又の二本杉

魚沼市小平尾
県指定天然記念物

諏訪神社境内の2本杉で、推定樹齢800年の大杉です。

1本は樹高49m、周囲7m。もう1本は樹高47m、周囲6mを計ります。昭和44(1969)年3月、県の天然記念物に指定されました。



石峠

魚沼市高倉
市指定史跡

会津と長岡方面を結ぶ重要路線です。戦国時代には下倉山城と栃尾城を結ぶ軍事上の要路で御館の乱では戦場になりました。峠の中間地点にある大石の窪みは、弁慶の足跡と言われています。



羽黒社の大杉

魚沼市新道島
市指定天然記念物

羽黒社の神木で周囲7.3m、樹高29m、推定樹齢800年です。羽黒社は、南北朝時代、南朝の武将羽黒俊賢の氏神であったと伝えられています。



三国街道(栃原峠)

魚沼市根小屋
市指定史跡

峠の掘削は寛永年間(1624～43)と考えられます。栃原峠の地名が見られるのは正保2(1645)年からです。幕府は距離が短く、かつ魚野川を渡る必要のない栃原峠ルートを三国街道として整備しました。



八十里越

魚沼市大白川
歴史の道百選 史跡(古道)

八十里越とは三条市吉ヶ平～魚沼市大白川～福島県只見町叶津までの越後と会津を結び物資が行き交った峠道。戊辰戦争で、河井継之助がいる長岡藩がこの峠で、新政府軍に抗戦したことで知られています。



六十里越

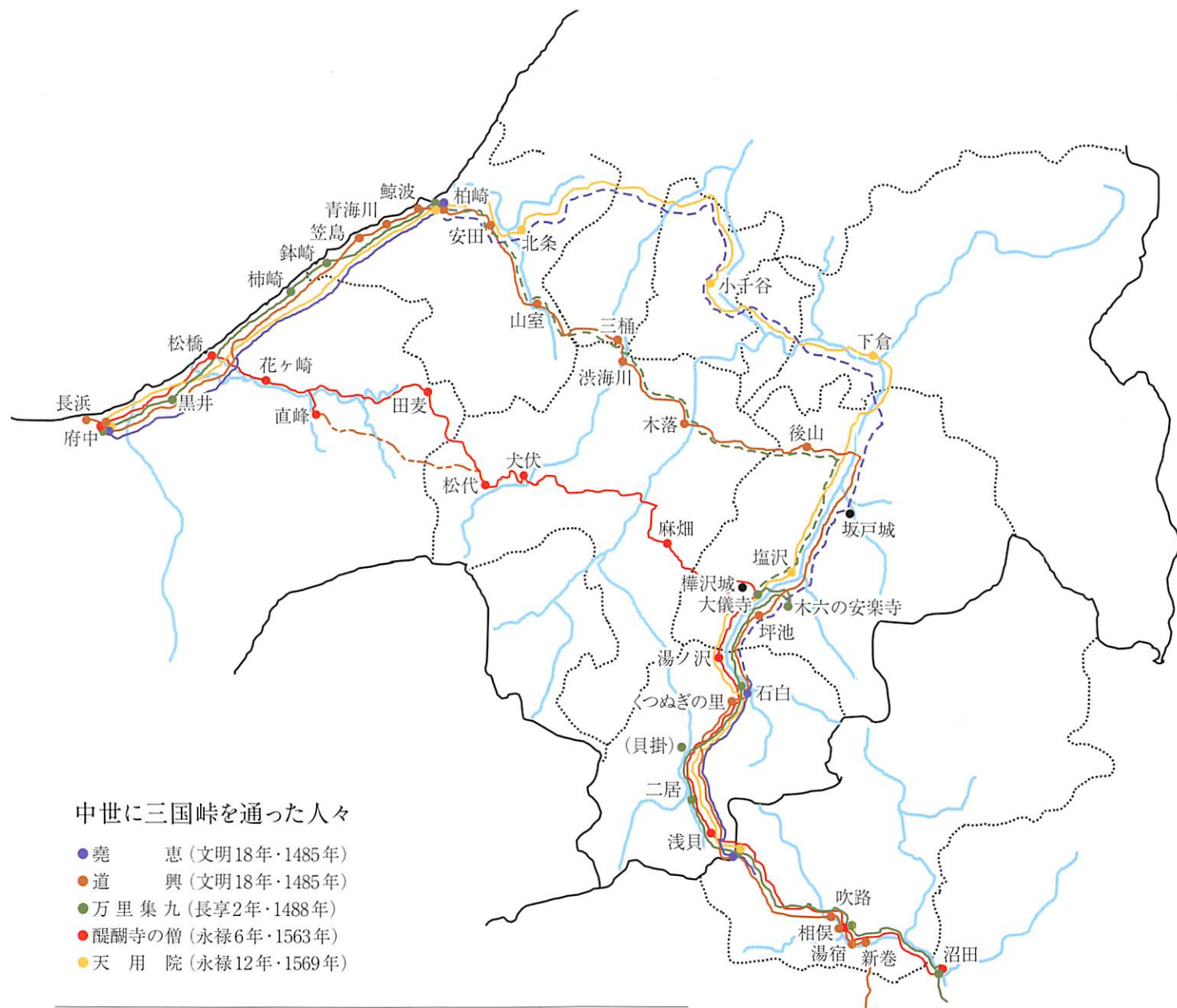
魚沼市大白川 国道252

魚沼地方と奥会津地方とを結ぶ要路。越後上杉氏と会津山ノ内氏との間で緊張した関係がしばしば起こり、軍用道路としての役割を果たしました。慶長5(1600)年の越後一揆の際には会津勢が六十里越から魚沼に入り、下倉山城主小倉主膳正を滅ぼしました。



■ 道の歴史を知る

「道の歴史を知る」ということは、「土地の歴史を知る」ということです。人が通るところが道になり、それが整備されて街道となり、さらに利用されて周辺が開発され、村や町が発達してきました。下記の図のように、地域のことを全く知らない旅の僧侶が通った道があるということは、その道が発達していて、その周辺には多くの家や村があり、経済活動をしていたということです。ある時代に、ある道の周辺に、人が住み、文化・歴史を育み、さらにその文化・歴史が人を育て、それを繰り返していきます。「道の歴史を知る」ということは、「土地の歴史を知る」ということで、それはすなわち「今この土地に住む人を知る」ということです。



天用院が通った行程が三国から越後府中に行く「大手口」と言われたものです。その他に脇街道が数種類あったと考えられますが、記録が残っていないため、不明な点は推定し、点線で示しております。また醍醐寺の僧が通った道は基本的に上杉謙信が永禄4(1561)年に整備した「上杉軍道(松之山街道)」ですが、途中関東に出陣する上杉軍と鉢合わせしたために回り道をしたと考えられます。

■ 中世前期の動きを石造物が語ります

石造物の一部には、造立した年が刻まれている場合があります、その年を「紀年名」と呼びます。南北朝の内乱は、一般的に元弘の乱（1331年）から後醍醐天皇が京都に政権を樹立した“建武の新政”（元弘3：1333年）の時期、そして、建武3（1336）年の南北両朝の抗争激化を経て、1343年の北朝方が優勢を決定する時期、さらに室町幕府の内部紛争である観応の擾乱（1350～1352年）で南朝方が息を吹き返し、南朝方の活動が九州に限られ、足利義満が全国を統一して、南北両朝が合体した明德3（1393）年までの62年間を指します。

その頃、魚沼地方にも南北朝の内乱の嵐が吹き、争いを背景に勢力の拡大、縮小が生じたようです。それを知る一つの史実が「板碑」と呼ぶ石造物です。本来、板碑の名前の如く、北関東では緑泥片岩という深緑色した板状の石を使った供養塔が数多く作られました。魚沼地方にも、関東地方から運ばれた緑泥片岩製の板碑が数は少ないですが発見されています。また、この魚沼地方には独自の「魚沼板碑」と呼ばれる灰黒色した川原石を利用した板碑が数多く確認されています。特に、南魚沼市大崎地区と十日町市川西地区に数多くの魚沼板碑が集中的に分布します。

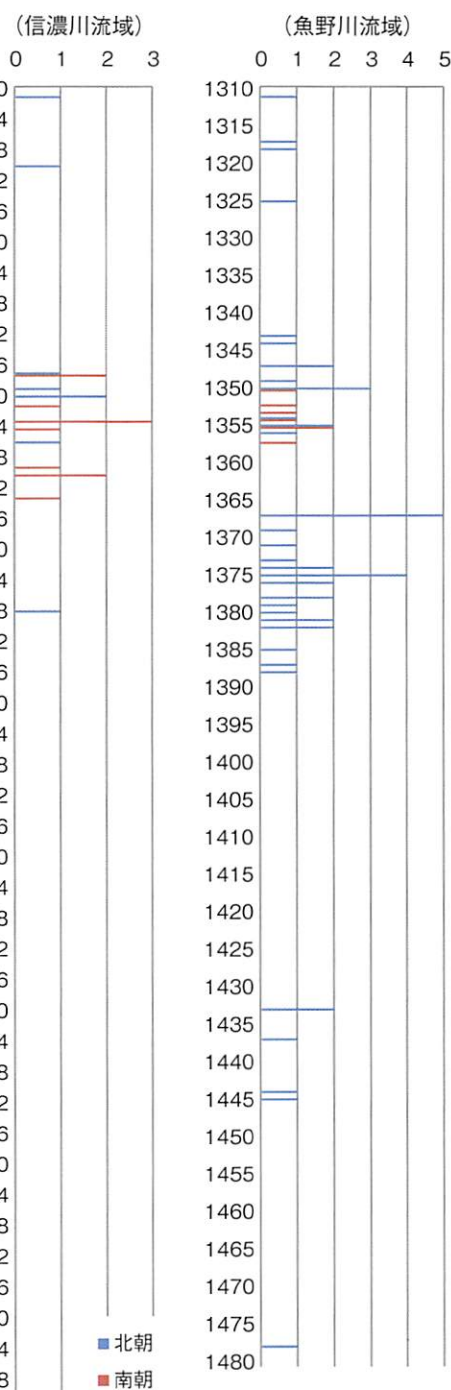
この板碑には、紀年名が刻まれています。この魚沼地方は、南魚沼市を中心とした魚野川流域と十日町市を中心とする信濃川流域に分かれます。この二つの河川流域に分布した板碑の造立年代を調べ、並べてみると、当時の勢力図の一端が垣間見ることができます。

このたびの調査で142基の板碑を確認しました。魚野川流域に98点、信濃川流域に44点ありました。大半が自然石ですが、緑泥片岩が5点含まれています。そこに刻まれていた紀年名を見ると、魚野川流域では北朝年号が52基あり、南朝年号が9基あります。一方、信濃川流域には、北朝年号が8基、南朝年号が11基でした。さらに、細かく検討するならば、面白い傾向が認められます。

魚野川流域の板碑群は、1311年が最古であり、1344～1358年、1368～1388年、1432～1444年の3つの時期に造立活動が認められます。また、南朝年号の板碑は、1347年～1363年に掛けて造立され、北朝年号の板碑と同時併存する状況が認められます。

信濃川流域でも、1311年の造立が最古であり、初期の2基は緑泥片岩に類似する板状の石が選択されています。造立前半期は南朝年号が優勢ですが、後半期には北朝年号に入れ替わります。

このように武士階級の供養塔であった板碑群を散策し、南北朝動乱の波が打ち寄せた魚沼地方の歴史ロマンに触れ、夜には郷土料理と地酒で語り合う旅も素敵ですね！



紀年名別個数
年代が正確に特定できないものは除く。



津南町・赤沢・永和梵字碑



南魚沼市・大崎・龍谷寺板碑

■ 戦国時代に名を遺した人物たち

1. 戦国時代の始まり

雪国観光圏内の地域の戦国史は、上杉謙信の祖父である長尾能景（ながおよしかげ）の頃に始まると考えられています。

この当時の越後国内は、守護上杉氏を頂点とした支配権力が統一されておらず、国内の様々な武士団が互いに争いを繰り返していました。

そんな状況にありながら頭角を現していくのが、上杉謙信の父：長尾為景（ながおためかげ）です。為景は、守護：上杉房能（うえすぎふさよし）と養子の定実（さだざね）を倒して名実ともに室町幕府も認めるほどの権力者として君臨していきます。

2. 上杉謙信の越後・関東支配

権力者長尾為景が亡くなると、為景の嫡男：晴景の代を経て、次男：景虎（後の上杉謙信）に権力が継承されていきます。そこに、室町幕府の関東管領職を代々世襲する山内上杉氏（やまのうちうえすぎし）が介入してきて、長尾氏と関東地域とのかわりが増々深くなっていきます。

関東では、相模国の主：北条氏康（ほうじょううじやす）が山内上杉憲政（うえすぎのりまさ）と覇権争いを展開し、山内上杉氏の勢力も衰退しました。父：為景の代から室町幕府とのつながりを重要視してきた景虎は上杉憲政の求めに応じて、山内上杉氏の名跡を継承して、初めて「上杉政虎」（うえすぎまさとら）と改名することになります。

これによって、越後国内から関東地域への侵攻政策が本格化し、戦国武将としての上杉謙信の名が知られていくようになりました。

3. 上杉謙信と武田信玄、真田氏の登場

越後には、国内を統一した謙信が君臨する一方で、近隣の上野国（現群馬県）と信濃国（現長野県）に侵攻してきたのが、甲斐国（かい・山梨県）の武田信玄でした。信玄は相模北条氏と駿河今川氏と三国同盟を結んで上杉謙信に対抗するようになります。

その結果5回にわたる「川中島の戦い」が起こり、北信濃の地域で激しい戦いが繰り返されました。武田氏が当地域に侵攻してきたことで戦況がさらに激化し、上杉・武田・北条氏の三大勢力が鎬（しのぎ）を削る一大戦場地域となりました。

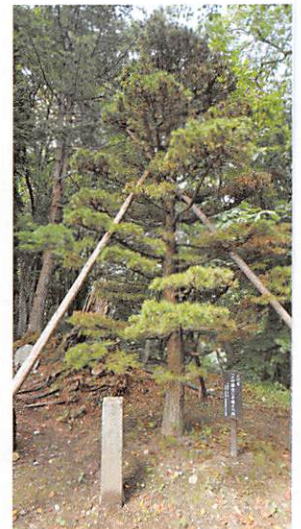
武田氏滅亡後も、信玄の薫陶を受けた真田氏が独自の勢力を構築し、上杉・北条氏と拮抗しました。



越後守護上杉房能が自刃した地
十日町市松之山天水越 管領塚



初代



三代目（現在）

上杉謙信公お手植えの松

室町	道興	聖護院門跡
	万里集九	禅僧、歌人
	飯尾宗祇	連歌師
	上杉憲実	関東管領
	上杉顕定	関東管領
戦国	上杉憲政	関東管領
	長尾政景	坂戸城主
	栗林次郎左衛門尉	上田長尾家臣
	樋口兼豊・主水助	〃
	直江兼続	上杉家家老
	真田幸隆・昌幸 真田信幸・信繁	武田家家臣 →信濃国衆

室町～戦国期に当地域に関係した主な人物

COLUMN

悲しい伝説が残る美しい鏡ヶ池 —魚沼市大栃山—

魚沼市大栃山周辺は中世応永7(1400)年頃、信州筑摩郡犬飼郷の地頭の犬飼兵衛太郎貞長が足利義満から広瀬郷穴沢(現在の入広瀬地区全域)を賜った場所です。貞長の三男犬飼小二郎長宗が初めて穴沢の地に入ってきて、犬飼の姓を改め穴沢を名乗ったと言われます。長宗は領内にあります鷹待山に城を築き、上杉方に属し、会津境となる六十里越の守備を行います。後に上杉氏の会津移封に伴い廃城になるものの、慶長5(1600)年の越後一揆(上杉遺民一揆)の際には下倉山城攻略の一大拠点となりました。その城の傍には鏡ヶ池と呼ばれる雪解け水が溜まった池(水源地)があり、水田、飲料水など人々の生活の助けとなりました。

当地域の池にも幾つかの伝説・物語があります。女神が手鏡を池に落とし水面を鏡がわりに

して髪を梳いたという伝説や「母親から頂いた形見の鏡と娘」の話で、大事な鏡を池に落とし、なんとか拾うと飛び込むも命を落としてしまう悲しい物語などがあります。

池周辺には、桜並木やブナ林がありますので、山城や古道の散策を兼ねてお出かけしてみたいはいかがでしょうか。



COLUMN

和議が成立したのに、本当に「道満丸」は殺されたのか？

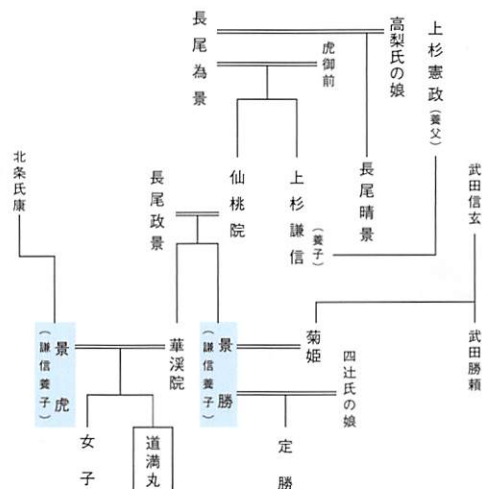
上杉謙信の養子であった景虎の息子、「道満丸」は9歳の若さで殺害されたとする通説があります。それは、謙信無き後の後継争いで景勝と影虎が争った「御館の乱」での出来事です。当時、上杉憲政の御館に劣勢濃厚になった影虎が道満丸を人質とする和議を、争いの相手である景勝に申し立てて受け入れられたといわれています。和議が成立したことで、人質である道満丸と憲政は、約束の引き渡し場に向かいはしましたが、景勝の手下によって二人とも殺害されました。

義と愛を貫いた景勝が、本当に和議を前提とし、9歳であった幼い道満丸を殺害したのでしょうか？

長野県栄村の常慶院は、上杉謙信の庇護の元、隆盛した名刹です。上杉家が会津へ、そして、米沢へ国替えした際も常についていった寺院です。この名刹・常慶院付近では、道満丸は、景勝の縁戚であった在地豪族の市川新六郎にかくまわれて、志久見の地で育ったと口伝されています。また近年、憲政と道満丸は、直江津の五智

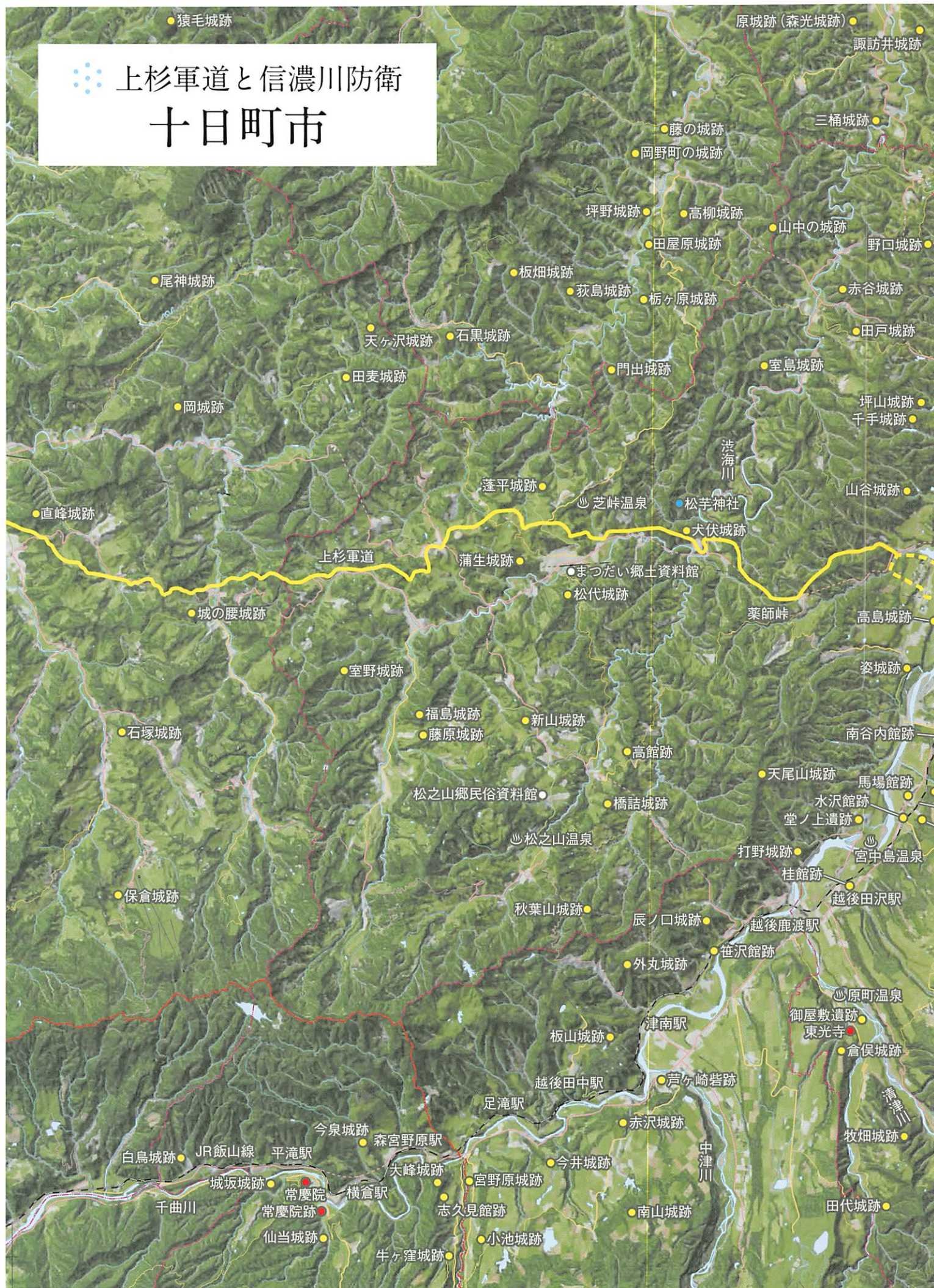
から海路、青森の今別に逃げ、遠地で生涯を遂げたとする新たなる「道満丸生存説」が浮上してきました。

さてさて、歴史ロマンの深淵に触れる醍醐味は胸ワクワクするものです。まずは千曲川流れる市河谷の常慶院近傍を探訪してみませんか！





上杉軍道と信濃川防衛 十日町市





十日町市の概要

十日町市の中央部には、南西から北東に向かって日本一の大河「信濃川」が流れ、その両岸には河岸段丘が発達し、西側には東頸城丘陵、東側には魚沼丘陵が連なり十日町盆地を形成しています。日本有数の豪雪地帯として知られ、冬に降り積もった多くの雪が、春になると雪解け水として丘陵から流れ出し、小河川を通して信濃川に流れ込みます。河岸段丘上や河川流域には広大な圃場が広がり、魚沼産コシヒカリの産地として全国的にも有名です。織物の街としてかつては京都の西陣織と並ぶ絹織物の一大生産地でした。河岸段丘上には縄文時代の遺跡が多く分布し、笹山遺跡から出土した火焰型土器・王冠型土器を含む深鉢形土器群は、平成11年に新潟県唯一、かつ全国で初めて縄文土器の国宝に指定されました。

■ 上杉軍道と信濃川防衛

室町時代の応永年間(1394~1428)になり、越後守護上杉氏から関東管領が出ると関東地方との交流が多くなりました。その後、越後国内における戦国時代の始まりは、永正期(1504~1520)の頃と考えられています。越後国府には妙雲院妙昭(みょううんいんみょうしょう)や倉俣実経(くらまたさねつね)ら、妻有出身の僧侶や土着の武士が守護上杉氏の奉行として在府し、上杉氏と越後守護代の長尾氏との関係性を早くから築いていました。元来、室町時代の妻有荘は、関東管領山内上杉氏の家領で、関東や信越に接する国境地域だったことから、関東を支配する山内上杉氏にとってこの地域は大変重要な場所だったと考えられています。そのため、永正期に勃発した「永正の乱」では、十日町から津南地域にかけての妻有荘が一つの戦いの拠点となり、武士ではない「地下人(じげにん)」と呼ばれる地域の住人が戦いに参加して活躍したという史実を文献史料から伺うことができます。永正の乱をきっかけとし、守護代長尾氏が台頭して下克上が起こると、十日町地域の土着の武士たちも進んで長尾氏の配下になったことが知られています。その後も越後国内で勢力を伸ばした長尾氏からのちの上杉謙信が生まれ、関東管領山内上杉氏を継承していくことになります。

永禄3(1560)年8月以降、「越後国主」長尾景虎(上杉謙信)は、関東管領上杉憲政から庇護を求められ、ほぼ毎年のように関東遠征(越山)に向かいました。上杉軍が進軍した道は通称「上杉軍道」(約76km)と呼ばれ、のちの松之山街道として知られています。春日山城(上越市)を出発して直峰城(上越市安塚区)で1泊し、室野城の脇を進んで蒲生城と松代城の間をすり抜け、2泊目の目的地である犬伏城へ向かいました。犬伏城を出発した上杉軍を待ち受けるのが渋海川の渡河と薬師峠越えで、渋海川と薬師峠の比高差は約200mありました。そして最大の難所だったと考えられるのが信濃川の渡河です。信濃川右岸の高島城と左岸の琵琶懸城は、信濃川渡河点を守る上杉軍の要衝に築かれた中世の要害として伝えられています。信濃川兩岸には現在の津南町から小千谷市まで、段丘崖上に大小多くの崖端城が築かれ、信濃川水運を監視することの重要性を考えると、いかに信濃川が重要な防衛線だったかが想像できます。信濃川を渡った上杉軍は3泊目を琵琶懸城で迎え、琵琶懸城を出発して魚沼丘陵上にある栃窪峠を越えて樺沢城へと向かい、関東方面の三国峠を目指しました。上杉軍道は謙信の指示により、坂戸城主だった長尾政景が交通路整備をしたと考えられており、迅速な移動を行えるよう整備が長く続けられました。

犬伏城跡 市指定史跡



築城年代は不明で、観応年間に北朝方の原田喜太郎が本拠地として南朝方と交戦したと伝えられています。その後貞治年間に上杉家家臣の丸山禅正、永正年間に清水采女正などが城主として治めました。御館の乱では武田勝頼が上杉景勝を応援するため軍を送り妻有荘に到着した際に坂戸城に入城したことから、坂戸城主の小森沢政秀は城を明け渡し犬伏城に移動しました。慶長3年の上杉景勝会津移封後、堀氏の支配となりましたが、慶長15年に廃城となりました。犬伏城の南東に現在の犬伏集落があり、当時は居館があった場所で空堀などが現在も残っています。

節黒城跡 市指定史跡

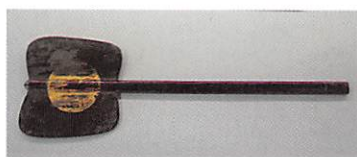


築城年代は不明で、南北朝時代の正平年間に新田義宗により築かれた説と、文和~延文年間に上野氏に築かれた説の2説伝えられています。また、発掘調査で発見された遺構から、新田氏が築いた旧節黒城を大改修し新節黒城を上野氏が構築したとも考えられています。

松芋神社

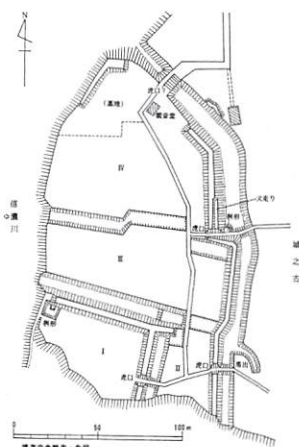
国指定重要文化財(本殿)/市指定文化財(木造狛犬、短刀、軍配、俳句献額、大スギ)

明応6(1497)年に建立された県内最古の茅屋根葺の木造建築物で、奴奈川姫命を祭神として坂上田村麻呂により創建されたと伝えられています。近郷の総鎮守で「松芋大権現」と呼ばれ、「麻織物の神」として信仰を集めました。上杉謙信が寄進したと伝えられる短刀(銘 備前長船兼光)と日の丸の軍配が奉納されていました。短刀と軍配は犬伏集落で保管され、実物の公開はされていませんが、まつだい郷土資料館でレプリカが展示されています。神社の本殿は昭和53年5月に国指定重要文化財(建造物)に指定されています。



琵琶懸城跡

構築年代は不明で、南北朝時代に羽川氏により築かれたと伝えられています。天正年間に上杉家の「御家中諸士略系譜」で、金子次郎右衛門が琵琶懸城に在城していた記述があります。琵琶懸城は大規模な平城で、信濃川右岸の段丘先端にあることから、対岸にある高島城とともに渡河地点だったと考えられています。1郭から4郭まであり、土塁や丸馬出、堀なども構築されています。現在でも多くの遺構が残る貴重な城跡です。



大井田城跡

県指定史跡

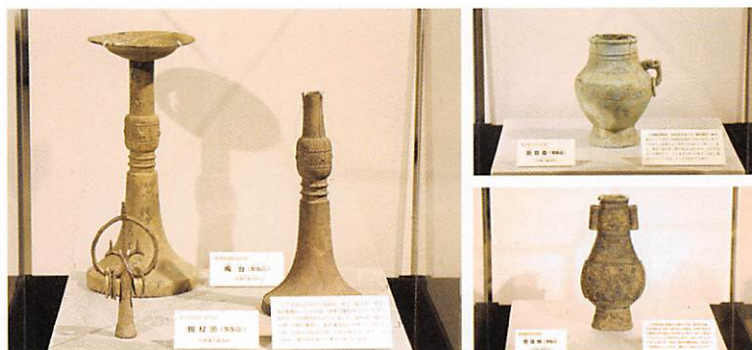
築城年代は不明で、南北朝時代の越後新田一族の中心勢力だった大井田氏の本拠と伝えられています。山頂に一辺約30mの三角形の主郭があり、その東側の尾根に二条の空堀が構築されています。主郭の西側には緩やかな傾斜の扇状地形を利用し、大小の郭を2列3段に積み重ね、その前面に2段の帯郭を巡らせています。その他にも高さ2mほどの土塁や畝形阻塞等の遺構も確認されています。



伊達八幡館跡



信濃川右岸の段丘上に立地する中世の館跡です。昭和62年に県営圃場整備事業に伴い発掘調査が行われ、約12,000㎡の調査で館跡全域と周辺の状況が確認されました。複郭式の館跡で、主郭と副郭、郭外で構成され、主郭では掘立柱建物が15棟、井戸や排水溝等が確認されました。出土遺物から15世紀～16世紀前半の館跡と考えられ、出土遺物のうち主郭西堀から出土した龍耳壺、管耳瓶、燭台、錫杖頭等の銅製仏具を含む281点が新潟県指定文化財に指定され、出土遺物は十日町市博物館で展示されています。



神宮寺

県指定文化財(観音堂、山門、十一面千手観音立像、四天王立像)/市指定史跡(境内及び山林)

曹洞宗臨泉山神宮寺は、大同2(807)年に坂上田村麻呂が開基したと伝えられています。十日町市四日町にあり、平安時代後期の本尊十一面千手観音立像と平安時代末期の四天王立像(伝広目天・伝毘沙門天)が新潟県指定文化財に指定されています。また、宝暦11年から明和6年にかけて造られた山門(茅屋根葺の入母屋造、高さ15m)、安永2年から天明2年にかけて造られた観音堂(茅屋根葺の入母屋造)も県指定文化財に指定されています。





信越国境をめぐる街道と山城・古刹

新潟県津南町 ・長野県栄村



信越国境に位置する新潟県津南町と長野県栄村には、千曲川・信濃川流域の両岸に北国街道の脇街道として「北国脇往還」があります。地元では、善光寺へ続く道として、「善光寺街道」と呼ばれ、道沿いには、山城や古くから続くお寺が点在しています。

中津川流域には、秘境・秋山郷を通り、草津温泉へと続く「草津街道」があり、関東への道でもあり、文人鈴木牧之や幕末の志士佐久間象山が通った道として知られています。



今井城跡

津南町大字上郷大井平／新潟県指定史跡

今井城跡は、信濃川の右岸、中津川の左岸の段丘面（米原Ⅱ面）の突端に築かれた中世の城跡です。源平時代の本曾義仲の臣下、今井兼平によって作られた城と伝えられ、戦国時代には、上杉氏の番城として戦国時代末期まで使用されたと言われています。

この城には、上杉謙信の部下であった金子氏や小森沢氏がいたとされています。

深い堀や本郭・二の郭、橋台、馬出、畝状堅堀の跡など、当時の様子が残っています。

北国脇往還

（善光寺街道）



北国脇街道は、信濃川沿いを通る道で、地元では善光寺街道と呼ばれています。

これは、長野県善光寺へと続く道として、信仰の道とも言えます。

道は信濃川兩岸にそれぞれあり、今も寺社やお堂、石造物、道標が残り、往時の様子を残している場所があります。

草津街道・秋山郷

見玉不動尊



草津街道は、中津川沿いの両側に草津温泉まで続く道です。直線距離では、新潟府中（高田）から関東へと抜ける最も近い道であり、中世の軍道と考えられています。道中には、秘境「秋山郷」が広がり江戸時代、鈴木牧之が『秋山記行』に旅して描いた見玉不動尊、猿飛橋、湯本温泉（切明）などの風景を残しています。

赤沢城跡

津南町大字赤沢字下城



赤沢城跡は河岸段丘の北辺の崖端にあり、下を流れる信濃川までの標高差は約200mです。

発掘調査により37軒の建物跡や堀、虎口が確認され、15世紀初めから16世紀の初頭の貿易陶磁、瀬戸美濃焼、珠洲焼、カワラケ、金属製品などが出土しています。

仙当城

下水内郡栄村堺月岡



仙当城は、二つの川が合流する段丘上の先端に位置し、中世、市河氏による拠点的な山城です。

現地には、山の上に幾枝もの掘切や郭を持つ広大な、山城が広がっており、当時の土木技術の高さを伺うことができます。

志久見館

（内池館）下水内郡栄村志久見



市河氏の拠点となった館があった場所です。現在は、水田が広がっていますが、広大な平らな土地や区画から当時の様子を伺う事ができます。

志久見川を挟み対岸には宮野原城跡を望む事ができます。

この場所からその後、市河氏の館は、現在の常慶院の場所へと移ったとされています。

北野天満宮

下水内郡栄村堺北野



学問の神様である菅原道真を祀った天満宮で、多くの信仰を集めており、江戸時代には多くの参拝者が訪れている絵図が残されています。

また、南側の街道は、野沢温泉へと続く古道が残されています。



常慶院 下水内郡栄村堺箕作

常慶院は、曹洞宗の古刹で、山門は大規模な造りとなっています。また、この場所には、かつてこの地を支配した市河氏の城館があった場所と伝わっています。



吉祥寺

津南町上郷寺石／津南町指定文化財

吉祥寺は、津南町寺石地区に所在する曹洞宗のお寺です。平安時代末期とされる薬師如来像や大同元年と彫られた鰐口が安置されています。

善玖院

津南町外丸／津南町指定文化財

善玖院は、新田義貞ゆかりの脇屋義氏が開祖と由来が伝わる曹洞宗のお寺です。

ご本尊の釈迦如来像は、鎌倉時代末期～室町時代の作とされています。



雪国観光圏における戦国史略年表

西暦	和 暦	月 日	歴 史 事 項	関連記事(※)
1467	応仁元		上杉顕定(あきさだ)が関東管領に就任する	
1488	長享2	10月	万里集九(ばんりしゅうく)、江戸を出発して上野国沼田から三国峠を越えて上田に入る	道の歴史を知る
1507	永正4	8月7日	越後守護上杉房能、守護代長尾為景の下剋上により、松之山の天水越で自害する	戦国時代に名を遺した人物たち
1510	永正7	6月20日	関東管領上杉顕定、長森原(南魚沼市)で高梨政盛(たかなしまさもり)と戦い、討死	南魚・湯→長森原古戦場
1549	天文18		武田信玄の信濃国攻略が進む	
1553	天文22		信濃の諸将、武田信玄に攻められ、長尾景虎(上杉謙信)に救いを求める	
1553	天文22	4~10月	第1回川中島の戦い	
1558	永禄元		上杉憲政、越後の長尾景虎(上杉謙信)を頼って越後国へ入る	み→三国街道と清水峠道
1560	永禄3	8月	長尾景虎(上杉謙信)、第1回関東出陣(越山)	み→宮野城跡
1561	永禄4	3月11日	長尾景虎、上田荘・妻有荘・藪神郷の水害に対し、徳政を実施する	
1561	永禄4	8~9月	第4回川中島の戦い	
1578	天正6	3月13日	上杉謙信が春日山城(上越市)にて死去し、「御館(おたて)の乱」が勃発する	南魚沼市、魚沼市ほか
1578	天正6	5~7月	上杉景勝、上田荘を守備する深沢利重(ふかさわとしげ)らに、荒戸城・直路城の普請を命じる	南魚・湯→三国峠清水峠
1578	天正6	6月12日	甲斐の武田勝頼、上杉景勝に味方することを承諾する	十→犬伏城跡
1579	天正7	2月3日	上杉景勝、北条勢に占拠されていた樺沢城・荒戸城・直路城を奪回する	南魚・湯→三国峠清水峠
1582	天正10	3月下旬	織田信長の軍勢が上野国に侵入する	
1584	天正12	11月27日	上杉景勝、家臣の樋口氏の本領と新地を「郡司不入」とする	
1585	天正13	10月17日	豊臣秀吉、真田昌幸に、真田家の進退の保障を伝える	
1589	天正17	~6月	豊臣秀吉による、北条・真田氏に対する利根吾妻地域の裁定が行われる(沼田裁定)	み→名胡桃城跡
1589	天正17	11月10日	名胡桃城事件が勃発したことにより、徳川家康、真田信幸に対し、豊臣秀吉に提訴するよう促す	み→名胡桃城跡
1589	天正17	12月9日	北条氏直、豊臣秀吉への執り成しを徳川家康に求める	
1590	天正18	正月	北条氏政、沼田城の普請を猪俣邦憲に命じる	
1590	天正18	2~7月	名胡桃城(なぐるみじょう)事件を契機として、豊臣秀吉の命令下、小田原征伐が実施される	み→名胡桃城跡
1600	慶長5	8月	上杉遺民一揆が起こる	魚→下倉山城跡 南魚・湯→荒戸城跡

※関連記事→各市町村の記事に合わせて、例えば、みなかみ町の記事は「み→●●●」と表記

■ 上杉謙信の「越山」略年表

回数	西暦	和暦	開始時期	越山の様相	帰国時期
1	1560	永禄3	8月29日～	関東管領上杉憲政を推戴して上野国（群馬県）に侵攻後、沼田地域に着陣、9月上旬に明間・岩下・沼田各城を攻略、沼田衆・白井長尾氏・惣社長尾氏・足利長尾氏の他、上野・下野・上総・下総・武蔵・常陸・安房国の諸将と共に小田原城を包囲、鎌倉の鶴岡八幡宮にて、山内上杉氏の名跡を継承して「上杉政虎」と改名	永禄4年6月末頃
2	1561	永禄4	11月～	上野国（群馬県）に侵攻、後北条氏や甲斐武田氏と戦う、館林城（館林市）を攻略、下野佐野氏の居城を攻撃する、上杉憲政とともに越後へ帰国	永禄5年3月末
3	1562	永禄5	12月16日～	沼田城に着陣後越年、武蔵深谷城ほか、下野佐野氏・小山氏、下総結城氏等を攻略	永禄6年4月中旬頃
4	1563	永禄6	閏12月19日～	厩橋着陣後越年、下野佐野氏再攻略、常陸小田城攻略	永禄7年4月中旬頃
5	1565	永禄8	12月20日～	沼田着城後越年、常陸小田氏攻略、下野佐野から上野館林に移って下総小金城・白井城攻撃	永禄9年4月下旬頃
6	1566	永禄9	7月24日～	沼田着陣後、横瀬氏・成田氏・下野皆川氏らが謙信軍から離叛、上野新田へ進撃	永禄9年9月上旬頃
7	1566	永禄9	10月11日～	大胡から佐野に陣を移し、後北条氏と合戦、白井城落城、佐野の仕置きを行う	永禄10年3月下旬
8	1567	永禄10	10月初頭～	沼田着陣後、厩橋・新田・足利を攻撃、佐野氏を再び攻略し、佐野在番衆を連れて帰国	永禄10年12月上旬
9	1569	永禄12	11月初頭～	沼田城着陣後そのまま越年、佐野氏攻略、館林長尾氏より館林領を没収	元亀元年4月
10	1570	元亀元	10月20日～	越山するも、すぐに帰国したか	元亀元年11月上旬
11	1571	元亀2	11月～	越山後に越相同盟（永禄12年6月に成立）を破棄、館林城落城、厩橋城に帰陣	元亀3年1月下旬
12	1574	天正2	2月上旬～	越山後、上野国内桐生領・新田領を主に攻略する	天正2年6月頃
13	1574	天正2	10月～	越山後、利根川渡河、鉢形城・忍領・松山領に続いて新田領・館林領・足利領を攻撃	天正2年12月頃
14	1575	天正3	1月下旬頃～	沼田着陣後すぐに帰国したか	天正3年2月中旬頃
15	1575	天正3	9月～	上野国内において主に新田領・桐生領を攻撃するも後退する	天正3年11月
16	1577	天正5	5月初頭～	上野新田領から下野足利領を攻撃して、ひと月以内に帰国したか	天正5年5月末

※参考文献 黒田基樹「謙信の関東侵攻」（池享・矢田俊文編『定本上杉謙信』高志書院刊、2000年所収）

■ 上杉謙信による遠征

上杉謙信は生涯、越後の外へ30回以上遠征をしています。

遠征先は、北陸、信濃、関東と様々です。

有名なのは、武田信玄と戦った信濃の川中島での5回に渡る戦いがありますが、越中国や能登国など現在の富山県や石川県へも10回以上遠征しています。

最も多く遠征した先は、関東で、その回数は16回にもなります。

越後府内から、犬伏城を経て、坂戸城や樺沢城を起点に清水峠や、荒戸城や浅貝寄居城の脇を抜け三国峠を通り、沼田や白井をはじめ、小田原まで関東へと攻め入ります。

雪国観光圏の地域は、上杉謙信が山を越えて、関東へ向かう途中に位置し、「越山」の地なのです。



天水越の管領塚について

十日町市松之山地区天水越、旧松里小学校のわきにある管領塚（かんれいつか・かんりょうつか）は、戦国時代初頭に越後国の守護を務めた上杉房能（うえすぎふさよし）が、この地で自刃したことを慰霊するために建てられたものです。房能は直峰城に隠居して関東管領の権威の元に政治を行っていましたが、永正4（1507）年、守護代であった長尾為景（上杉謙信の父）と対立して越後国府（上越市）を出て上野国（群馬県）に落ち延びようとする途中で、わずかな家臣とともに自刃したと言い伝えられています。



浦佐毘沙門堂の裸押合の習俗

記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財



毎年3月3日、魚沼地方に春の訪れを告げる裸押合祭りが盛大に行われます。毘沙門堂のある浦佐は古くから三国街道の宿場町、魚野川の河川交通の拠点、そして毘沙門堂の門前町として栄えてきました。

毘沙門堂は、大同2（807）年に坂上田村麻呂が建立したといわれています。この時に預けられた金銅製毘沙門天座像は別行殿に安置され、その御開帳は普光寺住職が一代一度と定められています。現在の毘沙門堂の本尊は椿材で作られた毘沙門天立像で、見附市椿沢町の

椿の大樹が献納されたといわれています。浦佐と同じ椿の木で作ったと伝えられる毘沙門天像が県内各地に存在しており、浦佐の毘沙門天信仰の影響の強さがうかがえます。

裸押合は、水行で身を清め、我さきに毘沙門天へ参拝するために始まったともいわれています。新潟県内外の講中から奉納された福餅や、盃・穀種・弓張提灯などが屋根の上や毘沙門堂内の押し合いの中で撒与され、参拝者は福を得ようと奪い合います。『北越雪譜』には提灯の骨一本でも田の水口にさせば、稲の実りが良くなり虫もつかなくなると書かれています。

祭りの場面場面で披露される「豊年踊り」や、クライマックスに行われる「ササラスリ」は非常に重要な儀式です。「ササラスリ」というのは、京都の石清水八幡宮からもらい受けた竹で作製したササラと呼ばれる棒をすり合わせ、心の中で真言を唱えて豊作を祈願します。裸押合祭りには、年の初めに豊作を祈願する、という意味合いもあります。これらの祭りの準備や運営、進行について、地元の義務教育終了後から30歳までの若者から構成される『浦佐多門青年団』によって取り仕切られることも、この祭りの大きな特徴と言えます。

■ 魚沼地域の山岳信仰・修験道

雪国観光圏を構成する地域には、多くの山岳地帯が存在し、古代のころから霊山として多くの人々から崇められてきた歴史があります。

山岳信仰とは、簡単に言うと、山を神聖視して崇拝の対象とする信仰のことを意味します。その中で、「山伏」に象徴される「修験道」(注1)が浸透していきました。特に、四方を山に囲まれた南魚沼は、信仰の対象として、また実修の場として、「霊場」たる条件を持った山岳を有する地域であることが知られています。

南魚沼市に所在する八海山(はっかいさん)は、駒ヶ岳、中岳とともに、「越後三山」と称されています。これらの山々は、里から眺められる特徴的な山岳であるため、人々から「霊山」として崇められるようになっていきました。

そもそも八海山に対する原始的な信仰の始まりは、農作を守ってくれる水分神(みくまりのかみ)や作神が山に鎮まりましている、というものだったと考えられています。

麓に住む人々は、あえて山には入山せず、山麓の里地に鳥居や小さい祠を作って遥拝し、祭祀してきたという歴史があり、その信仰は現代まで受け継がれてきました。

また、頂上に広大な湿原を持つ苗場山は、古くから「天狗の苗代」、「神の苗場」として神聖視されて山であることが知られています。

南魚沼における山岳信仰は、在地の山岳崇拝に外来の文化の伝達者である遊行宗教者たちの活動が加わり、ますますの発展を遂げていくのですが、特に吉野・熊野の修験山伏たちや白山・石動山など北陸霊山の聖たちの影響もあり、これに関東霊山の信仰も加わって活況を呈していくことになります。

(注1) 修験道とは、山へこもって厳しい修行を行うことにより、悟りを得ることを目的とする山岳信仰が仏教に取り入れられて成立した日本独特の宗教を意味します。

※参考文献 宮家準編『修験者と地域社会—新潟県南魚沼の修験道—』(名著出版刊、1981年)



冬の八海山遠景



苗場山遠景

南魚沼市	八海山・駒ヶ岳
	金城山
	巻機山・坂戸山
湯沢町	苗場山
	正面山・荒沢山
	セツ小屋山
みなかみ町	谷川岳
	万太郎山

主な山岳信仰の山

❖ おわりに ❖

この冊子は、雪国観光圏推進協議会・雪国文化WGの平成29年度学習会を通じて調査・報告したことを、座長の佐藤雅一を中心に原 眞・中嶋紀子・田村恭平・安立 聡・小沼香奈・笠井洋祐・佐藤信之・高木公輔・田村 司が協議し、分担執筆した。

また、一般社団法人雪国観光圏の井口智裕・細矢智子から助言をいただいた。

以下の方々から、ご指導とご協力を得た。感謝を申し上げます(敬称略)。

月岡 恵・本間敏則



上杉謙信 越山の地

蘇る戦国時代

監修
(一社)雪国観光圏

全体編集
雪国文化研究ワーキンググループ

デザイン・編集・印刷
株式会社 滝沢印刷

発行日
平成29(2017)年3月31日